

後期マルクスの疎外論：『資本論』における労働の病理学

秋元由裕

(日本学術振興会／京都大学)

<要旨>

伝統的マルクス主義とは、超歴史化された労働概念に立脚することで、資本主義を歴史的に特殊な体制として批判する思想である。ここでは、「労働」一般が人間の本質に属する活動として肯定的に理解されることによって、資本はこの労働に対して外在的であるが故に正当化され得ない存在として、すなわち労働生産物をただ搾取するだけの不正な所有関係として否定される。モイシェ・ポストンの云うように、かかる思想は「労働の視点からの資本主義批判」をその特徴としている(『時間・労働・支配:マルクス批判理論の新地平』)。搾取批判は、搾取されるところの労働を自らの批判の規範的基礎とするが故に、批判の矛先が搾取される当の労働それ自体のあり方に向けられることは決してない。実際、伝統的マルクス主義においては、たとえ資本主義の下にある労働であれ、資本の軛から解放されるべき肯定的活動としての意義が付与されている。この点は、いわゆる「現実社会主義」諸国家において、機械制大工業の資本制的所有関係からの解放が主張されていたことと相即している。伝統的マルクス主義は、労働の歴史的諸形態に対して無関心であるが故に、資本制の下にある労働の自己実現をも要求する結果に至ったのである。

そのような「労働の視点からの資本主義批判」を哲学的に基礎づけてきたのが、やはり「労働」の超歴史的かつ規範的な概念に基づいて構成されてきた、疎外論である。すなわち従来の疎外論は、どのような種類の労働であれそれを人間の本質の対象化＝確証行為として肯定し、人間の本質が対象化された所産としての労働生産物が収奪されることを「疎外」として説明してきた。たとえ資本の下にあるのであれ、労働が人間の本質の対象化行為である限りは一般に有意味なのだと考えられるならば、その主張は、耕作された大地が耕作者に帰属すると唱えるジョン・ロックの所有権思想、ないしはアダム・スミスの労働価値説とおおよそ等しい内容をもつ。だが、無垢で「本来的」なものとして捉えた労働に対し、その生産物を搾取する不正な所有関係として資本主義を捉える限り、労働それ自体が資本の下で組織されていることは没却されざるを得ない。

たしかに資本の指揮下においてであれ、そこでの生産に従事する当事的主体は、自らの身体と精神に基づいて労働を遂行している。直接的生産過程は、資本によって形態的にも実質的にも包摂されてはいるが、その生産を担う労働者の主体性は、不変資本のようにその全てが資本の支配下にある訳ではない。しかしそのことが却って労働者にとっては、資本の下での労働が「自己労働」であるかの如く感覚される根拠なのである。資本主義における搾取や疎外を不正として判断する基礎には、たとえ資本の下であれ自らが労働して「人間と自然との物質代謝」に寄与していることを自負する、独特の感覚がある。この感覚それ自体が、資本主義において構成される主体性の原型なのだとすれば、「労働の視点からの資本主義批判」が資本主義批判を完遂することができないのは、その批判が、批判対象に

よって準備された実定的なものに依りかかっているからであろう。

そのような伝統的マルクス主義に対しては、1980年代より特に英米圏の分析的マルクス主義者たちが、ロック由来の「自己所有権原理」から「平等原理」を截然と区別することを通じて、資本主義批判の再建を試みてきた（G. A. コーエン『自己所有権・自由・平等』）。彼らの試みは、資本主義批判において従来不問に付されてきた規範的基礎について、なるほど新たな省察を促しはした。けれども平等原理とはそもそも、労働に従事していることを他者との同一性として共有する、そのような主体性に発する要求である。その限りで、資本主義批判において平等原理を要求する思想は、やはり資本の下で構成された労働の主体性に依存しているにすぎない。

この点を踏まえる限り、本邦において一定の影響力を有する「アソシエーション論」（大谷禎乃介『マルクスのアソシエーション論』）もまた、資本主義的労働をつうじた諸個人の「文明化」「陶冶」作用なるものを「未来社会」への足がかりとして単純に肯定してしまう点で、資本主義批判としての有効性を疑われざるを得ない。これに対してマルクス自身は、資本制が資本制それ自体に対応した主体性を創造する機制であることを洞察し、したがって素朴な意味での資本主義批判が資本主義を別の形で再生産させる逆説へと至るほかないことを、『資本論』の随所で示唆しているように思われる。実際、労働が「害悪」（『パリ手稿』）として経験される事態の核心を問うことがマルクスの意図だったのだとすれば、マルクスの思想を「自然支配」の単なる継続と捉えてしまうフランクフルト学派の見方（アドルノ『否定弁証法』、A.シュミット『マルクスの自然概念』）もまた、再検証を要求されるであろう。

<研究成果>

秋元由裕「資本制的労働の抽象性と歴史性：マルクス批判理論の規範的基礎について」、北海道哲学会・北海道大学哲学会共催マルクス生誕二〇〇年記念シンポジウム：「資本の他者を探る」第一報告、2018年12月22日。

Yusuke AKIMOTO: Marx's Philosophy on Natural History. In: Andrea Altobrando et. al. (Ed.), *Natural Born Monads*, De Gruyter, 2020 (in press).